

---

# 楽園の旅人

海松房千尋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽園の旅人

### 【Nコード】

N4097Q

### 【作者名】

海松房千尋

### 【あらすじ】

もうしわけありませんが、OPP終了まで、しばらく更新できません。一時完結にします。

西暦二六〇〇年代。

超光速航行を可能としていたハイパードライブが、長年にわたって時空に溜め込んでいた歪みが開放され、宇宙の秩序が崩壊した。

時空の膨張は乱れ、ハイパードライブはその機能を失い、人類社会

を結び付けていたアンシブル・ネットワークまでもが寸断され、引き裂かれた巨大な人類領域は、その手に残された、それぞれのゲートルートで独自の時間と歴史を生きることになった。

……舞台はこの大崩壊から4000年後の宇宙です。

宇宙は再び安定を取り戻しつつありますが、ハイパードライブはまだ不安定なままで使えません。

地球系列の人々は、点在する特異点をゲートとして用い、宇宙の深淵を超え、再び拡大と拡散を繰り返しています。

そして、4000年前、半径15000光年に及んだ広大な領域の各地に取り残された人々も、それぞれ独自の発展（もしくは後退と再発展）を遂げています。

そんな世界の片隅で、懸命に（？）生きる自由交易船の乗り組み員達のお話。

他サイトにて掲載済み

## V i a t o r e (前書き)

三〇年以上過ぎてもなお輝きを失わない、「トラベラー」(Traveler <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC>)「世界への称讃と憧憬をこめて。

## V i a t o r e

「だから俺はいやだって言っただんだ！」

貨物室で決死の作業を続けながら、通信機に向かって声を荒げる。が、目的地がアンバーゾーン（連邦の星間植民航路局による渡航制限種別。危険な順に、レッド、アンバー、イエロー、グリーン）であることを知った段階で、代案を出せなかった自分も悪いといえは悪いのだ。

『うるさい！ 船長は私よ！ つべこべ言わずに荷物を固定して！』

もちろん言い争っている暇はない。

と、不意に通信端末が起動し、管制官からの全館一斉通信。管制業務を放棄して撤退するという。

曰く「幸運を祈る！」だそうだ。

いよいよ事態が切迫している事だけはわかる。接近する反政府軍の射撃が、威嚇射撃から本格的な攻撃になっているのだ。

外部スクリーンの表示はまるで戦争映画の世界だ。

これは本気でマズイ。このままでは宇宙港が占拠されるのは時間の問題である。

「ジェシカ！ 連中が埠頭に侵入したぞ！」

『今出るわ！ 舌をかまないでよ！』

その瞬間。船は埠頭の係留索を引きちぎり、宇宙空間へと飛び出していた。全く、何から何まで無茶苦茶な女船長である。

今ので六千クレジットから一万クレジットの損傷は確実だ。これ

だから軍人上がりのパイロットは嫌になる。とはいえ、それを口にするほど馬鹿じゃない。なにより……。

「 出航さえしてしまえば連中に船はない。なんとか助かった……のかな? 」

『 ……さあね? 』

そつけない態度だが、これは正直仕方ない。

これからもつとも経済的な軌道を計算してそれに乗せ、延々惑星直径の百倍の距離にまで移動しなくてはならないのである。

きつと今彼女の頭の中は、軌道計算と今回の航路での赤字と負債の計算でいっぱいになってるのだろう。

まったく、四等寝台、つまり冷凍睡眠装置の中で眠っているシェイクが多少うらやましくなってしまうそうだ。

もちろん本気で代わりたいとは思わない。

貨物室での作業 主にコンテナ類の固定作業 が終わって、機関室をまわり、ざっと機関と動力のチェックを行なった。

もちろん燃料系の確認も念入りに。ついでに眠っているシェイクの状態を確認する。

「 いい気なものよね? 」

ジェシカだ。一応気にしているのだ。無茶な操船だったという自覚はあるらしい。

「 シェイクの心配なら無用だぞ。固定作業は完璧だ。軍用の対G緩衝剤までぶち込んだのである 」

ふん、と鼻を鳴らして診察用のベッドに座り込むジェシカ。

どうやら主・人工知能に後を任せて来たらしい。しばらく暇になるのだろう。

「さて、問題が幾つかあるんだけど。いいかしら？」

なんて奥ゆかしい。

問題が、いくつか、ときた。正直問題だらけのはずだが、それは言うまい。

「支払いか？」

もちろん支払いに決まっている。船のローンはまだ十五年分は残っているのだから。

これ以上無いほど大きな問題である。

「それもあるけど、とりあえずは大丈夫、それより問題なのは、次の仕事が決まってるって事」

と、万策尽きたといわんばかりの声と顔とで状況を説明してくれる。タンガード・ゲートは第六惑星の衛星軌道外縁を公転しており、現在は恒星を挟んだ反対側にある。

直線距離にして四天文単位以上の彼方だ。

そして次の仕事はFCGSのニウラ。依頼は二週間後にニウラからN10を経由してUE系列のカナンまで、『Yamatoshipping Service』の不定期便のコンテナ輸送だという。

正直何が問題なのか全くわからない。余裕の行程のはずだ。タンガードまでSD（シフト・ドライブ、光速転移駆動機関）で凡そ三十分、タンガード⇨エルミナ・ゲートからエルミナ⇨ニウラ・ゲート

トまでが、往路で確か十五分程度。

寄港してから一週間とたっていない、必要とされる時間は、そうは変わらないはずである。

「何が問題なんだ？」

「あのね、実はね？」

なんだか非常に嫌な予感がしているのだが、一体そこにどんな理由があるのかさっぱりわからない。

まさかゲートの使用料金が支払えないなんてはずがないし、燃料補給はタンガードに寄港したその日に終わらせたはずである。

「なんだ？」

「反物質を積んでるのよ。しかも、大量に」

思わず、へえ、つと声を上げ、そのまま氷つく。状況が理解できたのである。

反物質はこうした後進国では需要が極めて高く、しかも比較的高く売れる物質であるため、チャンスと設備をもっている船長であれば必ず生産し、備蓄し、交易ルートに乗せている。

「……捨てるわけにはいかないよな？」

「あなたがこの船のあらゆるデータとタンガード宙港に存在するあらゆるデータを改ざんしてくれたら　喜んで捨ててやるわ」

脳が沸騰するほどの勢いであらゆる可能性を探ろうとするが、結果は見えている。



反物質を積載した状態では、SDは使えない。  
当然、通常航行で四天文単位の移動などはじめからお話にならない。

つまり、この高価で厄介なシロモノを、なんとしても処分しなくてはならないということだった。

「下は、無政府状態だぞ？」

「無政府状態ね」

「反物質はどれくらいある？」

「ほぼ1キロ」

「昨日の商談はそれか？」

「……格安だったのよ……」

「……それは、騙されたというんだ!!」

## V i a t o r e (後書き)

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www.w36.atwiki.jp/2the-paradise/>

## **S t o w a g e   T h e   S t o w a w a y   0 1 (前書き)**

本編のはじまりです。

なお、導入部分の話は時系列がずれています。

『いつもの事だけど問題発生よ』

発生したのが「いつもの事」なら自分は気にしないが、「問題」が発生しているのであれば、気にせざるを得ない。

だが、出来れば食事が終わってからにして欲しかった。

目の前には、溶けたチーズがたっぷりとかかった、ガーリックソースで味付けをした分厚いローストチキンと、こちらもまた湯気上げるブロッコリーとスイートキャロット、そしてミックスビーンズが、二重に重ねられた皿の上に美しく盛り付けられている。

「それで？」

芸術品なみの完成度を誇る自分の『作品』に、急いでフォークを突き刺し、ナイフを入れて切り分ける。

邪魔されてたまるものか、これが唯一の楽しみなのだ。

『海賊に追われてる』

咀嚼をはじめようとした瞬間、舌の上から余韻すら残さずチキンが消えた。

「それを早く言え！」

『忙しいのよー！』

慌てて立ち上がった部屋を飛び出す。

幸い面倒な乗客は居ないし、目的地は……次のゲートは灯台だけか。駅が無い。当然防衛システムも貧弱で、危険な自然物の接近に対して以外反応しない。

「状況は!？」

狭い船橋の中央、船長席で背中をシートに預けたまま、両手で空中を掴んだりひっぱたりしながら、まるでクラシクの指揮者のような動きをしている美しい金髪の女性。

彼女がこの自由交易船『サンディ・メリッサ』の船長、ジェシカ・ラモーナである。

なんで女船長の船の名前が、女性名二つを並べたものなのかは知らない。

そのうち話してくれるという約束だったが、未だ果たされていない。

因みにこちらを見ようとしてもしないが、彼女には自分が部屋に入ってきた事はもちろん、こちらの心拍数から体温や血糖値や血圧まで把握できているはずだった。

現在は通常航行中であるため、脳に埋め込まれた情報用のインプラントを経由して、全ての操船を行っているのだ。

とりあえず船橋の正面モニタ付近にあるはずのカメラを睨みながら、船長席から見て左側の航法担当者の席に座る。

「ギリギリ。現状が維持できればゲートへ飛び込むまで追いつかれない」

「維持出来なければ？」

「こっそりいろんな物を捨てて、それからケーサツに通報する」

つまり、その捨てる役目を任せるというわけだ。

「知ってると思うが、一応言っておくぞ。俺は船医で株主の一人だ。密輸品のブローカーでもスチュワードでもゲートキーパーでもない！」

「そうね。ついでに船長でもないわ」

まったく。と、何万回となく繰り返した呟きとため息の連続記録をさらに更新し、

ゲートのリアルタイム情報を確認し、現状のデータから、到着時のゲート状態を推測させ、それにあわせてゲートドライブの設定開始を指示する。

幸い客は全員三等寝台か四等寝台で、こうした場合でも詳しい状況を報告する義務が無い事になっている。

黙っていても問題無い。

「ところで『いろんなモノ』ってなにがあるんだ？」

既に準備してあったらしい。即座に補助モニタが起動しリストを表示する。

まずは武器。

ねじ式の時限爆弾からはじまり各種重火器、対人ミサイルの類まで、これは全部無許可所持品らしい。

それから各種禁制品。

地球産の天然素材を使ったバックに靴にコートに財布に缶詰や保存食。それから種子や胞子の類もある。

輸出入規制に間違いなく引っかかる。

そして最後に……。

「…… あー、船長。すまんが、頭痛がするので部屋に戻って休

ませて貰っていいかな？」

「ドアはロックしたわ。そんな暇があるわけないでしょ？ 一体何を言い出すの？」

だって、多分これは捨てるわけにいかないだろう？

「一つだけ確認させてくれ」

「なに？」

「ジョゼット・コランティヌ・サヴァティエとヴァレール・ディエ・ローラン・サヴァティエって、どんな食い物なんだ？」

「日本人って鯨だけじゃなくて人間まで食べるのかしら？」

やっぱり人間だよな……。

「もう一度いっぞ。俺は船医だ」

「そうね？」

「その俺に人間を、この船から放り出せとも言つつもりか？」

「やめてよ、そんな事言わないわ。救命ボートで降りてもらおうの」

お話にならない。これだけは断じて許容できない。

「ジェシカ！ それだけは断固反対するぞ！ 誰がなんと言おうと、

そんな真似は絶対にさせない！」

「あら残念。そうしたらなんとしても逃げ切らなきゃいけないわね？」

え？ 心のどこかで警告音が鳴り響いている。何を間違えた？

「あなたがそこまで言うならなんとかしてみせるわ。任せて。絶対に逃げ切ってみせるから。だから人工知能の制御権を回してちょう

だい」

人工知能の制御権？

つまり。

「ちょっとだけ揺らすから、全艦放送をおねがいできる？ あ、それからスチュワードロボットも固定するように命令してもらえる？」

仕方がない。

コマンドを選択して自分の制御権規定を確認する。

ここは我等が船長の腕前を……。

「おい、これはなんだ？」

見慣れない項目が戦闘画面に付け加えられていた。

操縦席（もちろん船長席からでも操縦は可能）を見ると、操作パネルの配置が変更になっている。

「ああ、射撃管制系を更新したの」

へー、と、素直に喜べたらどれほど嬉しいか……。

「……幾らだ」

「大丈夫、格安だったのよ！ さあ、早くキーを用意してよ。三〇分でケリを付けてみせるわ！」

頭が痛くなってきた。

なぜこんな大量の禁制品が積んであるのか。

なぜ怪しげな（やたらと立派な名前の）密航者が二人も乗り込んでいるのか。



それから、なぜ、儲けの薄い三等客室ばかりを重点的に募集していたのか。

いつもなら戦闘なんて絶対に回避するであろうこの女が、なぜここまで強気に出ているのか。

シートを回して船長席を見つめる。

「幾らだ」

「……」

「聞こえない！」

「……クレジット」

「はつきり言え！」

怒鳴られ、しっかり耳には届いたが、脳が理解を拒否したらしい。

「トリプルAならコレくらい当たり前なの！ 最新鋭なの！ いままでの3倍以上の射程距離がとれるの！ 海賊船なんて目じゃないの！」

クラスA A Aの射撃管制装置。

つまり、探知装置も更新したのだ。

幾らといった？

四クレジット、ちがうな。

たしかメガがついてた。

……うん。

四メガ、クレジットだ。

「……ははははははは……」

「なによ……？」

もう知らん。

この航海が終わったら、俺はもう船を降りる。  
絶対辞めてやる！

黙ってパスワードを入力し、首に下げていたキーをスロットに差し込む。

「制御は解除。何時でも戦闘できる」

「ちよつと？」

自律機械に固定作業の指示を出し、自動機械を連れて船内を確認。それから船内放送だった。

「一〇分で準備する……！」

一人二人騒いだ乗客も居たが、暴動鎮圧用の電磁警棒を持った護衛用自動機械を連れた俺が行くと、即座に沈黙してくれた。

全員素直にベッドに横になり、ベルトで身体を固定しているはずだった。

そういえば……。

と、自室に戻る途中で密航者達の事を思い出す。

「ジェシカ、密航者は何処に隠れてる？」

『最後に積み込んだコンテナがあつたでしょ？ アレがそう。そろそろ戦闘予定宙域。潮汐力に注意して？ あ、いけない、完全にブラックボックスだから、放送しても聞こえないんだ！』

アレか？ 普通の貨物コンテナにしか見えなかったが      ！

「戦闘はちよつと待て！ 今から行って来る！」

『わかった、なるべく引き伸ばすけど、早く戻って。ダメならコン

テナの中で待機！ パスワードは『ハナコサングコドモワウンダ』よ！』

一瞬眩暈を感じるが、それが眩暈でない事に、即座に気付く。つまり、船の重力制御装置が、急激な慣性系の変化に対応し切れなかったのである。

一般的な客船ならおよそ3G 程度までは対応可能な重力制御系を搭載しているが、この船は違う。

ジェシカの我侭で、6Gクラスの重力制御系が搭載されているのだ。

それが限界を超えたのだとすると、今の機動は完全に戦闘機動だ。慌てて階段を駆け下りながら、滅多に使うことのないインプラントを起動する。

船体関連の情報を表示しつつ、ロビーの受付横から食品・備品倉庫へ飛び込み、格納庫扉の開閉パネルを叩くようにしてタッチする。目の前に積み上げられたコンテナの壁を見て、一番最後に積み込まれたコンテナを確認する。格納庫の数箇所に、荷主ごとに積み込まれたコンテナの山。固定されているとは言っても、その圧迫感はなかなかのものである。

検索した積載貨物データリストには「繊維・衣料品」とある。場所はすぐ目の前。一つだけポツリと単独で置かれた貨物コンテナ。

「あからさまに怪しいじゃないか！ 『ニイタカヤマノボレ！』」

あれ？ 開かない？

「あ、『ハナコサングコドモワウンダ』」

微かな電子音と共に、偽装されていた扉部分が数センチほど浮き

上がる。

「突然すまないが、緊急事態が発生……し、た」

隙間から突き出された右手と、それに握られている黒いグリップ。上部には、やはり黒い色の四角い突起がついており、突起のこちらの部分には小さな穴が開いている。

見た事が無い形状だが、そこから飛び出す物なら予想が出来る。コヒーレントな収束光か高密度の電磁波。もしくは瞬間的に広がる無数の短い針の群。

「あなたは誰ですか？」

## **Stowage The Stowaway 01 (後書き)**

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

「あなたは誰ですか？」

若い、いや、幼いといえるほどに若い声。少女か、それとも変声期前の少年か。突き出された腕の奥、幾重にもなったカーテンというには高価そうな生地であったが、の隙間にキラリと光る瞳を見つけ、そこではじめて、突き出されたまま微動だにしない右手が、驚くほど小さく幼い事に気が付いた。恐らく後者だろう。

「この船の船医長だ」

「どうやってこの秘密を知りましたか？ 船長はどうしました？ あの方が来ないということは、もう既に殺されたのですか？」

完全に誤解されている。

「あの方」は一体、この少年に何を吹き込んだのだろうか？

と、銃を向けたまま一步前に出てきた少年に、思わず目を見張ってしまふ。

ジェシカも美しい金髪をしているが、この子はその遥か上をゆく。「金髪」というようなレベルではない。まさしく黄金の糸だ。透き通るような白い肌に、赤に近い茶色にブルーとグリーンの縞が入った美しい瞳。角度によっては紫にも見える。着ている服は確かくたびれた感じはするが、相当高価な自然素材を生かした製品で、大粒のダイヤが輝くカフスボタンに肩から胸を飾る細い黄金色の鎖、襟元に輝く金銀細工と巨大な真紅の宝石。扉というか、ハッチを押し開けた左手の中指に輝いているのは、天然石のルビーを彫り抜いて作った、印章としても使う指輪。

……これは、見た事がある。

そう、つい先日。

出航の直後。

ニュース映像で！

「……どうかご無礼をお許しください。ですが現在この船は　！」

その瞬間、時折感じていた微かな潮汐力が、いきなりの大波として襲い掛かってきた。

両膝が後ろに引かれて右腕は前、左腕が後ろで頭が右だった。

どんな動きをしたんだ！

三つの悲鳴が響き渡り、どこかで何かが割れる音、それから固定し損ねたらしい、工具類が跳ね回る音。

「早く中へ、身体を固定して！ 多分これからもつとゆれます！」

四つん這いの情けない格好で叫びつつ、自分も慌ててコンテナの中に駆け込む。

折り重なって下がる分厚い生地を抜けると、内部は凄まじく豪華な貴賓室であった。

再び激しい振動と潮汐力のダブルパンチ。

驚いている場合ではない。

二人を4点支持式のベルトを使って緊急用の座席に身体を固定し、自分も予備の座席に座ってベルトを締める。

二人の子供は流石に顔色が悪い。

「心配ありません。あの女は、あの者はあれでパイロットとしての腕だけは確かなのです」

何を思ったのか、青い顔のまま微笑む。

「自分でもそう言っていました」

ジェシカはそういう時には一切遠慮などしない。盛大に自信の経歴と腕を誇示してきたのだろう。

「なんていって、ました、か？」

このコンテナに施された防御系はかなり優秀らしい。インプラントで戦闘の推移を確認しようとしたが、やたらと時間がかかっている。

つまり開いたままになっている扉から漏れ入ってくる電磁波以外、完全に遮断されているという事だ。

時折思い出したように襲い掛かってくる重力加速度と潮汐力の波状攻撃に、舌を噛みそうになりながら、なんとか笑顔を保って聞いている。

「アスリン海軍では、ナンバーワンは私だった、と」

少なくとも四年前まではその通りだったし、今でも恐らくジェシカが最高だろう。

リアルタイムでの受信は諦め、戦闘の経過だけを要約させて確認する。

「あのや、ろ、う！」

何が海賊だ！

思わず我を忘れかけたが、少年、つまりヴァレール・ディディエ・ローラン・サヴァティエこと、現スタラスラドガ皇帝の孫、一〇何番目かの皇位継承者が驚きに目を見張っている。



「失礼しました。こちらの話です。もうしわけありません」

もう一度インプラントで確認した『海賊』の船体を確認してみる。ブルーのラインと特徴的な樹木を模した紋章。

アスリン共和国海軍の駆逐艦相当艦である。確かに通商破壊を目的とした艦艇であるから、ある意味『海賊』ではあるが……。

ため息なのかなんなのか、腹に力を込めて息を吐き、すばらしい軌跡を描きながら自身の古巣の艦艇を攻撃するジェシカ。

『海賊』が放った三度目の斉射を交わした直後、駆逐艦の側面に火花が散った。

機雷を使っていたらしい。

恐らく今までの狂ったような旋回は、すべて『海賊』の軌道を自らがばら撒いた機雷源へと誘導するための策略だったのだ。

『無事？』

声の一部が途切れたが、言葉としては聞き取る事ができた。黙ったままインプラント経由で答えを返す。

『肉体的には』

『良かった。これからあの船を鹵獲するから、二人を連れて船橋に来てもらえる？』

鹵獲？

『あー、まてまて、鹵獲とかなに言ってるんだ、バレたら海賊行為で縛り首だぞ！』

冷や汗を滲ませながら、ニコヤカ、に二人へ微笑み、ベルトを外

してたち上がる。

『なに言ってるのよ！ 一体どれだけ機雷ばら撒いたと思ってるの！ お金ばら撒いてるのと一緒なんですからね！ 撒いた機雷だって自走式なんだから、全部回収するわよ！』

……この女、ケチなのかなんなのか全然わからん。

四メガ・クレジットもの買い物を平然と行うかと思えば……機雷？ 自走式なんて積んでなかったはずだぞ？

とりあえず「どうぞ」とか「こちらへ」とかぶつぶつ言いながら、船長が呼んでいる事を伝え、格納庫を出て船橋へと向かう。

『その機雷は何時買ったのかな船長さん？』

『出航する前に決まってるでしょ？』

『なぜ言わない！』

『ちゃんと言わよ。あなたも一応は株主ですからね。ちゃんとまとめて提出します』

改めて船を降りると心に決めて、怒りに震えながら会話を切断する。

そこでようやく落ち着いて二人のサヴァティエ公を観察する事ができた。

いや、鑑賞と言ったほうがいいだろう。

狭い通路に、陳腐な例えであるが、まるで春の陽が射し花が咲いたように思えた。

実に美しい二人である。少年を見た時もあったが、少女の方も驚くほど美しい。一〇年もすれば、もちろん結婚してしまっているだろうが、恐らく絶世の美女と言われているだろう。

スタラスラドガは連邦加盟国としては珍しい、絶対王政の星間帝国である。連邦とアスリン共和国との中間に位置し、ホッフアへと

つながるゲートルートを支配しているため非常にお金持ちの国としても有名だったが、モルモタバの惑星上で内乱が発生し、地上ではその混乱が拡大していた。

因みにこの二人のサヴァティエ公は、その混乱の中で行方不明となっていたはずだが、なぜここに居る。

その秘密とカラクリも、なんとしても納得のいく説明をしてもらわなくては……。

階段を上がって船橋の扉を開けると、即座に起立して二人を出迎え、主・人工知能に補助席を用意させるジェシカ。  
なるほど。

色気だけはジェシカが圧倒的に上だな。

……なにせ、適当な挨拶を交わしただけの、こんなガキまでふらふらと顔を赤らめているくらいだ。

「船長、それより海賊に襲われたと聞きましたが、大丈夫だったのですか？」

「もちろんですわ。それで、それについて殿下のお力に縋りたく思うのですが、よろしいでしょうか？」

「私であれば喜んでお力になりますよう」

即答。

「ありがとうございます。大変嬉しく思いますわ殿下。それでは、早速なのですが、私を殿下の、臨時の衛士として任命していただけますか？」

は？

「実は先ほど撃破した海賊の正体が判明しまして、それがアスリン海軍の息のかかった者達だったらしいのです」

アスリンと聞いて途端に二人の表情が曇る。  
当然だった。

戦場に出る事を誉れとしているスタラスラドガ王家の者達は、アスリンとの戦いの中で何人もその命を落としている。確か二人の父も叔父もアスリンとの戦いで命を落としていたはずであった。

「つまり」

と、サヴァティエ公の口調がガラリと変わる。

「私の庇護を受けたい。そう申すのだな？」

「はい、大変申し訳なくありますが、一時的に、しかも、可能な限り秘匿しなくてはなりません」

しばらく考え込んでいるサヴァティエ公を、なにやらちょっと困惑顔のサヴァティエ公女が見つめている。

インプラントで検索すると、スタラスラドガで貴族というのは要するに、それぞれが拝領している領地の国家元首なのだ。つまり庇護下に入るという事は、その国に亡命すると言っているのと同じ事なのである。

「いいでしょう。それで貴女のお役に立てるのならば、紳士としても騎士としても、非常に喜ばしくおもいます」

絶対騙されるタイプだな。骨抜きにされて身包み剥がされ捨てられる。

「それでは、サヴァティエ公ヴァレール様に、心からの忠誠を」

「受ける」

「ありがたき幸せ。それではこれからは、お二人は私の部屋でお休み下さい。私は仕事に戻らせていただきます」

そつなく会話して膝をおつて頭を下げると、再び席に戻るジェシカ。

軽く正面モニタを睨みつけると立ち上がり、船長室へと続く扉の前へと二人を導き、一応中からは出ないようにして欲しいとだけ伝えて船橋に戻る。

「ジェシカ。やばいぞ？ N26に戻るべきじゃないか？」

もちろんそんな事は承知の上だったのだろう。エル・アラメインと次のココモ・リスは惑星国家で星系は中立地帯だったが、その次の寄港予定地であるガレータは違う。ゲートを越えた瞬間からアスリン共和国なのだ。

「もちろん引き返すわよ。荷物は全部ココモ・リスで売りさばけるものばかりだし、委託業務もココモ・リスまで。あとはもう何も予定が入って無いんだから」

それはそれで問題だった。

一応サヴァティエ公との契約は、二人を無事にスタラスラドガへ届ける事で、安全を確保するため、一度逆方向に向かい、その後チヤンスを見計らってスタラスラドガへと戻る事であり、前金である程度の必要経費は受け取ったが、残りは成功報酬である。

要するに定期収入が無いのだ。

「衛士って給料でるのか？」

「正式な衛士なら出るわよ？」

「非正規なら？」

「さあ？ 愛情くらいじゃない？」

勝手にしてくれ。

「それで、本当に拿捕する気か？」

もちろんその気なのだろう。船体はかなり傷んでいるだろうが、ココモ・リスのような国なら、残骸のような船でも喉から手が出るほど欲しがるはずだ。

「何のために衛士になったと思っているの？」

鹵獲した船舶の売却を合法的に行うため……？

「頼むから海賊やろうとか言わないでくれよ？」

「海賊なんてやめてよ、私掠行動って言って！」

防音装置が無ければ船の外にいたって聞こえそうな怒鳴り合いになったが、結局互いにある程度の譲歩を引き出しあう事に成功した。つまり、海賊行為はしない。が、襲われた場合はその限りではない。これは、サヴァティエ公二人をスタラスラドガに送り届けるまでの暫定的なルールとする。それから最低あと一人は船員を増やす。ジェイクの治療費のための預金には絶対手を出さない。船の改造を伴う買い物をする場合、必ず事前に協議する。である。

広げたところで、どうあっても狭いリクライニングのシートに二人で寝転び、つま先で慎重に、制御パネルに乗っているショーツを摘んでいるジェシカの足を見ながら、軽いため息を漏らす。

船は降りれなそうだし、商船株は暴落しそうだ。

……どうか無事にメイン・ゲートルートへ戻れますように。

## Stowage The Stowaway 02 (後書き)

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www.w36.at.wiki.jp/2the-paradise/>



「それで、一体何を食べさせてくれるって言っの？」

ジェシカの台詞は絶望の淵にたった俺の背中を思いっきり押してくれた。

崩れ落ちるようにして膝を着いたところに更なる追い討ちを喰らう。

「食堂に行く。じゃね？」

背後で閉まる扉から、最後にふんわりと素敵な花の香りが漂ってきたが、一瞬で消えうせる。

……酷すぎる。

目の前には部屋中を転がったらしい椅子と、粉々に砕けた食器類、各種データシートにどうやら割れたワイングラスの中身を被った、高価な紙の本。

そして、なにより胃袋には一欠けらも到達できなかった昨夜の作品の数々。

忘れていた自分が悪いのかもしれないが、これはあまりにも酷すぎる。

固定してあったその他の家具も、跳ね回った椅子や食器の類の直撃を受け、かなりの損害を出している。恐らく鍋にあったスープの攻撃を受けた音響用のメインデッキは完全に死んでいるだろう。

無駄と知りつつ、震える指でデッキのスイッチを押してみる。

……返事がない。ただのしたいのようだ……。

涙を堪え、インプラントを通して清掃用の自動機械を呼ぶと、修理不可能な物については全て破棄するように指示して部屋を出る。

昨日の昼から何一つ口にしていけないと言っのに、完全に食欲が失せていた。

「あ、先生、良かった、子供が怪我をしちゃって……！」

いきなり現実に取り戻された。

急いで頭を切り替えて、即座に診療室へと案内する。

三等室の客ばかりだが、それだけに数が多い。当然出番が回ってくる機会も増えてしまうのだ。

特に昨夜はみんなひどい目にあっていたのだ。

寝台に固定されていた時間はそれほどでもなかったが、部屋に閉じ込められて、朝まで一切出れなかったのである。

幸いけが人も急病患者も出なかったが、閉じ込められたストレスからか、子供が喧嘩をはじめて怪我をしたらしい。

それだけでなくも予定は六時間以上遅れているのだ。これは早急にフォローしないと叛乱がおきる。

「ジェシカ。一応乗客にも何かフォローしたいんだが、食堂は開放してもいいか？」

何時の間にか食事を終えたらしい。ジェシカは船橋にいた。

『任せるわ。それから鹵獲船の船員が武装解除に応じてくれたわ、向こうはずいぶん酷い状態みたいで、全員救命ボートに移ってるのよ。どうする？ こっちの船に移す？』

そんな事は船長の判断で何とかしてくれ！

「移すって、どうしろっていうんだ？」

「コンテナ広げて閉じ込めるとか？」

思わすうなり声が漏れる。そんな状態では安全を確保できない。

「ダメだ。いざと言うとき全員が身体を固定して身を守れる事が絶対条件だ」

「言うと思った。でも六人もいるのよ。何かあってからじゃ遅いし、やっぱり向こうの船に閉じ込めておく？」

流石にそれもマズイ。主・人工知能が把握している鹵獲船のデータを確認すると、動力炉が完全に死んでいる。

よほど運が悪かったらしい。

まさか高々三〇〇トン（排水素トン）級の商船が、五〇口径の荷電粒子砲やら自走機雷やらで、ここまで嚴重に武装しているとは思ってもみなかったに違いない。

流石に装甲は薄いが電子戦装備やら戦術コンピュータやは、これらの旧式駆逐艦とは比べ物にならない物が搭載されているのだ。

それこそ借金が倍になるくらいの規模で。

「船員室を使おう。三部屋とも空いてるから、一部屋に二人ずつだ」

『いいわ。警備ロボットは空いてるわよね。しばらく全部使うからよろしく』

「武装解除は念入りにな？」

『誰に言ってるのよ？』

……それから昼過ぎまでの忙しさと言ったら、目が回るどころではなかった。

もちろん血糖値が下がりきっている事も要因の一つであるが、それは点滴を適量静注することで凌ぎ、三等客室の全員に食堂での昼食と、部屋で食べるためのスナック類を配って回ったのだ。

かなりの出費だったが、気分を良くした客たちが、売店でアルコール類やらソフトドリンクやらを購入したため全体としてはそれほど利益率を落としたわけではない。

生鮮食料品の消費が想定外の量を示していたが、鹵獲船の食料庫の中身でお釣りが来るだろう。

連結管はまだ繋いでいないが、全員を閉じ込めたら一度向こうの様子を見てこようと心に決めて、ようやく食堂に腰を下ろす。

スチュワードロボットにインプラント経由で、何か適当な軽食を持ってくるように指示（日替わりのAランチという物だった）すると、我知らずテーブルに両腕を投げ出し突っ伏していた。

既に一三時を過ぎていた。

客席に向け、微かに調理時の香りを流すよう、エアコンディショナーの調整を行っているため、途端に腹の虫が騒ぎ出した。

『忙しいところを悪いんだけど、？あの子たち？の様子を見てくれない？』

うん。そんな予感はしていたんだけどね。

「すまないが昼食が未だなんだ」

『バイタル値は未だ大丈夫だって言ってるわよ。これは最優先。社長としても船長としてもね？』

かなり凶悪な顔になっているはずだが、幸い周囲には誰もいない。捕虜を連行するためだったが、事情を説明して乗客達は隔離してあ

るのだ。

丁度両手を縛られ、下着姿にされた一人目の捕虜が通りかかったが、怯えた顔を慌ててそらした。

……噛み付かれるとでも思ったのに違いない。

「副長さんでしたか。船長はどうされましたか？」

なんて上品で、なんて心地よい声をしている少年なのだろう？  
殿下のためなら喜んで副長でもなんでもいたしましょう。是非。他の船で。

……二人は、なにやら真面目に勉強とやらに励んでいたらしい。

昨夜のうちに移動したコンテナの私物。その中にあった専用端末を使っているのだ。

テーブルの上にはホログラフィックの教師が情報画面と共に浮かんでおり、こちらを見て咳払いをしている。

『今は授業中なので後にしてもらえないかな？』

堅くて真面目そうな声をしているキャラクターだったが、もしかすると人工知能かもしれない。教育上の問題もあるため、慌てて礼儀正しく頭を下げると出直す事だけ伝えて船橋へ入る。

因みにホログラフィックの教師は、授業はあと三〇分で終わると教えてくれた。

こんな事なら食事をしてくればよかった。

と、後悔してもはじまらない。

船橋に常備してある栄養補助食品をいくつか取り出すと、正面モニタに表示したチャートを確認しながら、やはりこちらもプロティン・バーを頬張っているジェシカに声をかける。

「ジェシカ。ありやなんだな、すごいな？」

「言葉の意味はわからないけど、言いたい事は理解できると思うわ。可愛い二人よね？」

適当に頷きブロック状の高エネルギー・バーを頬張り、ジェシカが何を見ていたのか確認してみる。

……美味い。

チャートなんてどうでもよくなった。

何て美味いんだ。

チーズの風味がすばらしい。濃厚でクリーミー、そして微かで爽やかな酸味。

あっという間に貪り喰らうと、即座に次のパッケージを開く。

「ちょっと、こぼれてるわよ？ 一体何の真似？」

知ったことか。

とりあえず食事だ！

……少しだけ、ジェシカの視線が痛かった。

## Stowage The Stowaway 03 (後書き)

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

ウィリアム・ヘニング海軍大尉にとって、サヴァティエ公の個人衛士を名乗るジェシカ・ラモーナという女船長は、まさに疫病神そのものだった。

彼女はアスリン共和国のベルナムート出身の元海軍士官であり、ライクス宙域を巡るユトランド連合王国との紛争では、未確認も含めて合計十六万トンもの船舶を撃沈しているエース級の船長なのである。

それが、スタラスラドガ帝国モルモタバで行方不明となっていた、サヴァティエ公ヴァレール殿下の衛士として現れ、彼女にとっては母国であるはずのアスリン共和国の艦艇を拿捕して、ココモ・リスに堂々と入港許可を求めてきているのである。

「つまり、エル・アラメインで消息を絶ったメイフェア32は貴女が攻撃したのだな？」

「違います。攻撃を受けたので反撃したのです。非公式とはいえ、スタラスラドガ帝国サヴァティエ公の衛船に対し、問答無用で発砲したのはアスリン海軍です。私は殿下の安全を確保するため、止む無く反撃に出たのみ」

「しかし、貴女は呼びかけを無視して逃走したと……」

「当然です。今殿下がどのような状況におられるか、恐らく貴方でもご存知でらっしゃると思いますが、あの段階で身元を明らかにして殿下の所在を明らかにするわけにはいかなかったのです」

これはダメだ。と、ヘニング大尉はあっさりと匙を投げる事に決めた。文句は政府の方から正式に行ってもらおう。



現在彼女の船は、現在それ自体が一国の領土なのだ。

彼女の態度を見ると心底腹立たしいが、サヴァティエ公の個人的な衛士と言えば、軍務関連の大臣と同じであり、拿捕したアスリン艦艇は既にサヴァティエ公の領土内となる。

全く手が出ない。

それでも最後に聞かなくてはならない事が一つある。

「……メイフェア32の乗員はどうなっていますか？」

「捕虜として監禁してありますが、アスリン共和国からの要請があれば、何時でも返還交渉に応じる用意があります」

想定済み。恐らく全て予想できているのだ。

この後の展開についても。

早々に挨拶を交わして敬礼したところで、こちらの報告をイライラしながら待っているはずの上官の顔を思い出す。

「そういえば、船長とお呼びしてもよろしいのでしょうか？」

「けっこうです。私はサヴァティエ公の個人衛士であり、かつ、この船の船長でもあります。船長でも全く問題ありません」

「では船長、私の上官から挨拶がしたいと通信がつながっています。おつなぎしてよろしいでしょうか？」

微かに閃いた笑みに、ヘニング大尉はこの船長が自分の思惑を見抜いたらしい事に気付かされたが、その事については気にしない。

「では、私は先行して航路の安全を確保いたします。殿下によりしくお伝え下さい」

面倒な上司とのやり取りを省き、通信を切断したヘニング大尉は、即座にこの忌々しい船とその船長から離れるように指示した。

\*\*\*\*\*

遠ざかっていく海防艦の姿を確認し、そつとため息をつく。

古臭い形状の、四〇年以上も昔にカナンで使用されていたラファイール級護衛駆逐艦だった。艦名はグラチョワ。頑丈で手堅いだけの設計だったが、同級艦は六〇〇隻を超え、未だにドーンバイワース宙域全域で使用されている。

もちろんアビオニクスの類はある程度更新されているのだろうが、現代の一般的な砲戦距離において、主兵装の120口径10センチ荷電粒子砲は、収束率の関係でこちらの50口径10センチ荷電粒子砲と大差ない威力しか出せない。

ある意味商船相手であれば十分過ぎるほどではあるが、アレで海賊や私掠船と渡り合うのは相当苦勞するだろう。

意識をインプラントからの映像に集中し、ローマ数字で43と書かれた船体番号をぼんやり見つめていると、礼儀正しく軸線を上下左右に30度づつずらして加速を始めた。

頭を一つ振り、けっして軸線を向けないように、慎重に距離をとるラファイール級の姿を眺めながら、インプラント経由で、今朝発表した予定の通り、ココモ・リス最大の軌道宇宙港「マルグレット4」に入港する旨を放送する。

「ジェシカ、アスリン共和国との交渉はどうなってる？」

「明日の昼過ぎに誰か来るらしいわ」

誰かってだれだ？

「まあいい。とりあえず今日は休む。それから、人員募集の広告を依頼しておいたから、面接の依頼が来たら頼むぞ?」

「ええ」

…… 本当に大丈夫なんだろうな?

多少の不安を抱えつつ、自室に戻ると、貴重品等の保管用ケースに入れられたジェシカの荷物が、部屋の片隅に固定されていた。

自室を「主君」に明け渡したジェシカは、今は俺の部屋で寝ているのだ。

もちろん基本的には生活時間に一二時間のずれがあるため、この部屋で、二人が同時に眠る事はほとんど無い。

そして……。

「おかえりなさい、副長さん」

「ジョゼット・コランティーン・サヴァティエ殿下!」

ベット代わりにしていたソファアに腰掛けた、まるでお人形のような少女である。

純金で作られた極細の髪に、白磁の肌とアクアマリンの瞳。その唇は「女帝」と呼ばれるピンクの薔薇だ。

この少女には、是非レースでたっぷり飾られた、豪華なドレスを着ていてもらいたいものだが、もちろん現在の格好は、全く身体に合わないぶかぶかのつなぎである。

ここまで気品に満ちたつなぎ姿の少女というのも面白いが、そんな事を考えている場合ではなかった。

なんでこの少女が部屋にいるのか理解出来ずに、慌てて思わずフルネームで呼びかけてしまったのである。

これは確か失礼な行為に当たるはずだったが、ジョゼット公女は気にする事なく微笑むと、座ったまま右手を差し出してきた。

意味がわからず呆けたように立っていると、公女が眉を顰める。

「副長さん？ こういうときには即座に手をとって、立たせてくれるものなのよ？」

慌てて仰せに従う事にする。

「……うーん、狭いけど素敵なお部屋ね」

鈴の音のような。そんな表現が、特に日本語による表現を当てはめたいと、心のそこから思わせるような、可愛らしい声と仕草と表情である。

一体何をしにきたのだろう……いや、その前にどうやってこの部屋に入ったのが問題である。

「あの、殿下？ どうやってこの部屋に入りました？」

「船長室から操作して、主・人工知能に認証をもらいました」

なるほど。ポケコンピュタめ、船長の上位者として認識したらしい。

「それでは、一体どういったご用件で？」

「用件は三つありました。まず第一は、あなたに私の従者か衛士となつてもらふ事。第二は、しばらくの間で結構ですので、船長とお付き合いを停止していただく事」

はい？

「意味がわかりませんが……？」

「兄が苦しんでおりますの」

すわ病気か！ と、思わず職業意識が自己主張を始めようとしたが、そうでは無いだろうという事にも思い至る。

「お分かりになるでしょう？」

「……ご病気でらっしゃいますな？」

小さく可憐な鈴蘭の如き微笑に、思わずこちらも笑みがこぼれる。

「はい。一過性のものとわかっておりますが、本人は気付いておりません。不治の病と信じ込んでおります」

思わず小さくふきだしてしまう。この少女はなかなか頭がいい。ちよつとだけ、衛士になるのも面白いかと思ってしまった。

「もちろんタダとは言いません。愛し合う二人を短期間とはいえ引き裂くわけですから、それ相応の補償はさせていただきます」

うーん、なるほど。こうした所がお嬢様なのだろうな。

「……あの、殿下？」

まさか話の途中で口を挟まれるとは思っていなかったのだろう。少し驚いた顔のまま、首を傾げる。

「そういう事でしたら、何かするのは逆効果です」

「苦しむ兄を放っておけと？」

さて、なんと言つべきか？

「違います。男の子が成長する過程を見守るのです」

一瞬目を伏せ考え込んだが、突如現れた部屋一面の花をバックに微笑む公女。きっと俺のインプラントをハッキングする超能力でもあるのだろう。

「その通りですわね。あなたの言う通りだとも思います。……ねえ、副長さん。私はあなたが気に入りました。あなたにはやっぱり衛士になっていただきたいわ？」

「喜んで、と、申し上げたく存じますが、それもやはり止めた方がよろしかろうかと？」

「なぜです？」

少しだけ答えを迷うフリをして待ってみる。

「ああ、そうですね、確かにあなたの言う通り、条件がかわってしまいましたもの、そういう事でしょう？」

その通り。

「ですが、このような事は、お国では、もしかしたら失礼にあたるのかもしれませんが、もしよろしければ、提案だけでもさせていだいてよろしいでしょうか？」

再びちよつと首をかしげて優雅に手を動かして先を促す。

「では、私はあなたの正式な従者や衛士になるわけにはいきませんが、心の中では、衛士としてあなたに仕える事が出来ます。心からの忠誠を。それではいけませんか？」

公女の瞳は、まるで二〇年後の彼女を予想させるかのような、思慮深さと、一〇年前の彼女を垣間見るかのような、どこか臆病そうな色とで、瞬いていたが、それは時間にすれば、ほんの十秒ほどの

事であつただろう。

まっすぐこちらに向くと、少しだけ顎をあげ、右手をまっすぐ前に突き出す。

「あなたに、心からの忠誠を」

片膝をつき、公女の手をとって、厳かに宣言してから、その指先に口付けをする。

「……許します」

目を合わせて、照れ臭そうに二人で微笑んでいると、インプラントの緊急通信回路（SOS信号その他緊急時の発信を強制的に受信する機能）を使って強制通話が入る。

『みたわよ？ このロリコン！』

『うるさい、邪魔するな』

やましい事など、断固してない。

が、聞こえるはずの無い、ジェシカの生の笑い声が聞こえた気がした。

## Stowage The Stowaway 04 (後書き)

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>



「我が姫」を部屋までお送りする途中、ふと思い出して聞いてみた。

「そういえば、確か用件が三つあると仰っていましたか？」

「それはもう済みました。殿方の私室というものを一度見たかったのです」

なんとまあ可愛らしい。

いい年をして赤面しそうになるのを、インプラント経由で様々な情報を読み込む事で堪える。一番効果があったのは、やはり次の寄港地に関する情報であった。

マルグレット4は、ココモ・リス星系の第4惑星、ナツソーの静止軌道上に存在している。人口はおよそ七万。宇宙港というより植民衛星の規模であり、その形状は一風変わっている。重力波発生装置を使う代わりに、遠心力による擬似重力方式を採用しているため、居住区が巨大な円盤型をしているのだ。つまり、円盤の縁の内側が地面という事になる。

円盤の厚さはおよそ一〇〇〇メートル。直径は六〇〇〇メートルにもなり、内部は最外縁の1G区画から順に、0.5G区画まで、三つの層に分かれている。因みに第三層となる最外縁が居住区、二層目が農業区画、一層目が工業区画となっている。

無数の埠頭が突き出す巨大な宇宙港と、無数の鏡がフラクタルな模様のように浮かんでる集光設備。そして円盤部分。

居住区が単なる円盤に見えているほどであるから、その巨大さは、ちょっとした微惑星級であろう。

「どうしましたか？」

我に返った。足を止めてしまっていたらしい。

「申し訳ありません、なんでもございません」

「……ねえ副長、インプラントがあるってどんな感じなの？」

どうやらこの姫君は、そうした事を聞く事は恥ずかしい事だと思っ  
ているらしい。船長室の入り口の前ではあったが、こっそりと、  
何かの秘密を聞き出すように、声をひそめて聞いてくる。

「便利ですが、あまり好きではありません。なんとなく、別の人格  
の誰かが、頭の中に一緒にいるような感じがします」

「……幽霊みたいな感じ？」

思わず吹き出した。

「はい。姫さま」

「私は姫さまではありませんが、そう呼ぶ事は許します……下がっ  
てよろしい」

はい。我が姫。

部屋の中へと消える姫さまの後姿に恭しくお辞儀して、ため息を  
ついた。

……船橋へ入ると、ジェシカが珍しくぼんやりしている。

「どうした？」

「どうしてあの二人は逃げなきゃいけなかったんだと思う？」

「聞いてないのか？」

聞いてなかったらしい。

沈黙したジェシカをそのままに、席に着いて乗客名簿の送付だの港湾費用の確認だのから、残燃料の確認や補給量の確定、それから上陸中の宿泊施設の確保に、整備員の派遣依頼と、次々に業務をこなしていく。

「ねえ、あなたはスタラスラドガの事ってどのくらい知ってる？」

もちろんちようど一区切りついたところ。ぼんやりして見えても、その頭脳はフル稼働していたのだ。

「インプラントの基礎情報程度だな。元々俺はドーン・バイワース宙域には詳しくない」

「そうよね。そう言えばあなた地球の出身だったっけ？」

軽く頷き、視界の左手に浮かんでいたチェックリストを保存しウインドウを閉じる。

「そうだが、なぜだ？」

「どんなところ？」

疑問符が浮かんで見えてしまいそうだが、とりあえずジェシカの質問に付き合う事にする。

「綺麗だよ。殆どの土地が保護区になっているからな。残念ながら地表の大半が立ち入り禁止で、余程の事がなければ自由に飛ぶ事すらできない。居住可能区域は宇宙でも指折りの人口過密地帯になっている」

「私は、海の映像を見た事があるわ。綺麗だった。小型の送迎艇くらいあるクジラが泳いでいたわ。あれは何処の海だったんだろう？」

何を考えているのかさっぱりわからない。

「ベルナムートにも海はあるんだろう？」

「あるわ。小さなエメラルドみたいな色の海。泳いだり出来ないけど」

「感傷的になってるのか？」

「それだけじゃないけど、でも、うん。そうね。多分あの子達があんまりにもピュアだから、ちよつとだけね……？」

思わず吹き出しそうになるが必死で堪える。

こんなジェシカは滅多にみられるものじゃない。  
黙って先を促す。

「モルモタバは、スタラスラドガとN26の間にあつて、政治的にはスタラスラドガだけど、経済的にはN系資本に圧倒されてる」

ジェシカが情報画面を起動したのを見て席を戻し、航法席の情報スクリーンにもクローン画面を表示する。同時にインプラントで情報を呼び出しながら、ココモ・リスから受信した最新ニュースも合わせて確認していく。

「あの騒乱は、単なる政治的な主導権争いじゃない。間違いなくN系資本がからんでると思う。もしかしたらアスリン政府も何かやってたかもしれないけど、普通ならそう考えるべきなんだけど」

何処につながるのかさっぱりわからない。

「何か知ってるのか？」

「……モルモタバの海にはね、全長四キロに達する巨大な群体生物

が住んでるの」

情報が出てきた。

メグリンティムという巨大な軟体動物だった。それが何億と集まって癒着しあい、巨大な塊となって海を漂う。

想像を絶する。

「それが一風変わった起源と進化の過程を経ている生命らしくて、群体にはならないんだけど、ウェイクやドイルロックにもいるのよ」

慌てて検索するが出てこない。

「検索しても無駄よ。名前も違うし、ウェイクのは殻があって、ドイルロックには海がない。陸上生物なの」

ジェシカがデータを送ってくる。

似ている所もあるが、この三者が同じ種だとはとても思えない。が、もちろん珍しい事ではない。

ハイパードライブが生きていた頃ならどんな事でもできたのだから。

「確認されているのか？」

「ええ、一時話題になったらしいわ。なのに今は何処を探してもその情報はない」

「なぜそんな事を知ってる？」

「あの子の卒論のテーマ。それによるとね、N26のバイオベルトにも、同じ物が棲息していたのよ」

黙り込んだジェシカに気付いて振り返ると、目の前にジェシカの顔があった。

「つまり大崩壊前に誰かが頒布した？」

「モルモタバ、ウェイク、ドイルロック、どれを調べても二億年近く前の化石が見つかったているし、N26のも遺伝形質の調査から、同じ場所で二億年以上の進化を遂げている事がわかってる」

「そんな……っ！」

「もちろんこの生き物に宇宙航行能力なんて無い」

ありえない。二億年前では人類なんてその影すらない。

「ねえ、なら？誰が？この生き物をばら撒いたっていうの？」

つまり……。

「あの子はそれに気付いている？」

「そして何処かの誰かはそれを隠蔽したがつっている」

「スタラスラドガ帝国を敵にまわしても、か……？」

ジェシカの左手が伸び、俺の襟首を掴むと膝が腿の上に乗ってきた。

「楽しくならない？」

右手が俺の髪を掴む。ジェシカの吐息が頬に熱い。

「……何処の神様かは知らないけど、私は心の底から感謝するわ。あの二人に引き合わせてくれた事を……」

口をふさがれた。

俺は、俺も、後悔はしたくない。



## **Stowage The Stowaway 05 (後書き)**

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>



「だから冗談じゃない！ そんな事は断固認められない！」

「どうして？」

そんなに不思議そうに言われてもこっちが困る。

「ジェシカ、この船は民間船だろう？ 今だって十分過ぎるほど重武装なんだぞ？ その上さらに防衛スクリーンだと？ だいたい何処の世界に駆逐艦級のアビオニクスを装備した貨客船があるっていうんだ！」

ただでさえ狭い船橋に、無理やり設置された簡易ソファ―ベッドで悠然と足を組み、人差し指を真下に向けている。

うん。ここにある。あるんだ。そんな船が。どこかのお間抜けな船長兼船主の意向で、そんなチグハグな船が出来た。まともな神経なら絶対やらない。なぜなら意味が無いからだ。普通は……だが。

「だーかーらーっ！ それがそもそも間違ってるって言うんだ！」

「もう、いい加減に怒鳴らないでよ。疲れちゃうでしょ？」

「誰が疲れさせてるんだ！」

これだけ一方的に怒鳴っていながら、追い詰められているのは多分俺だ。この女は、ジェシカは今こちらの補給線が限界にまで伸び切る瞬間を待っているのだ。そして、こちらの攻勢が限界に達した時に、全戦力を集中した一斉攻撃をかけて来る。間違いなく。問題は、それを回避する術が全く無いという事だった。もし一瞬でも気を緩めれば、その瞬間に反撃が始まる。一度始まったら、恐らく俺に勝ち目は無い。なんとしても今のうちに何らかの言質をとらなくてはならない。

「いいか、これ以上はどうやっても動力炉の出力が足りない。新しい動力炉を手に入れる経済的余裕も無い。第一そんな物を手に入れたとしたら、今度は主・人工知能の能力不足に悩まされかねない。」

ついでに、人工知能の交換なんて向こう十年は不可能なんだ！　どれだけローンが残ってると思ってるんだ、一五年だぞ？　一五年だ！　それを三〇年にしたいとでも言うつもりか！」

と、口笛でも吹きかねない様子のジェシカが、指を鳴らした。準備を整え、俺がこの台詞を出す瞬間を待ち構えていたらしい。

インプラントに主・人工知能からデータの送信許可を求める信号が入る。即座に許可する。

「忘れていたわ。我が社の新しい資産状況を把握してもらえる？」

……膝から力が抜け、そのままソファーに座り込む。

「アレが売れたのか？」

アレ、つまりアスリン共和国の護衛駆逐艦相当艦である。買い手はアスリン共和国で、俺が想定していた価格の八倍以上出している。「オークションにしたのよ。楽しかったわよ？　最終的にはウル藩国とアスリン共和国の一騎打ちになってね、まさか仮想敵国にデータ処理すらまともに終わっていない自国戦闘艦を奪われるわけにはいかないものね？　ウル的外交官はかなり悔しがってたけど。因みに身代金の交渉は継続中。士官が二人もいるからさうとう吹っ掛けてやれるわよ？　どう？」

即座に幾つかの試算を行い、ジェシカの提案を検討してみる。

「ジェシカ。これならローンの期間を半分にした上で新しい船が買えるぞ……？」

「嫌よ」

……意味がわからん。

「だって、シェイクが起きた時に全然違う船に乗ってたら……。あなたにシェイクでも、あんまりいい気分じゃないんじゃない？」

「それが理由か？」

まあね、と、ちよつと照れ臭そうに言うジェシカ。反論できない。法的には完全にジェシカの物になってはいるが、元々この船はシェイクの物なのだ。

「まあ船長はお前だしな。好きにするさ」

このまま上手くゆけば、適当な指定貨物便の臨時配送を請け負うだけでも、シェイクの治療費くらいは捻出できる。

「なあジェシカ。シェイクが目覚めたら、今度はお前の方が年上なんだな?」

「ええ、もう二度と兄貴面はさせないわ。一緒に生まれたのに、偶然そっちが出口に近かったってだけで一生兄貴だなんて許せないもの」

出口って何処だよ? 大体もつと他に言う事はないのか?

「もういい」

完全に脱力し、そのままソファに横になって目を閉じる。

「何が?」

「シェイクさえ戻ってくれば、また昔みたいに……」

「同じってわけにはいかないわよ?」

ジェシカが席を移ってきた。どうやら膝枕をしてくれるらしい。

「何が?」

「私達の事、シェイクが知ったら……」

腰を抜かすかな?

「どう思う?」

「もう一度寝込んでじゃうわね?」

と、ニヤリと笑って、なんとなくいい雰囲気になったところで、外線が入った。

“ ココモ・リスの港湾管制官からです ”

どうやら仕事らしい。

ジェシカは船長席へ。俺は航法席。空いたままの操縦席が目に入り、本来ジェシカが座るべきは操縦席なのに。ふとそう思う。

自分よりも大きな船を曳航したまま入港するなんて初めての経験だったが、ジェシカにとっては慣れた作業だったらしい。

淡々と、実に見事な操船で、「マルグレット4」宇宙港の85F埠頭に入った。

人工知能に指示して下船が可能になる時間を放送させ、スチュワ

ードロボットの配置を任せる。

「なんだか知らんが、やたらと長い航海だった気がするぞ……定期便関連貨物の搬出は三〇分以内に始まる。それから、スタラスラドガの葉巻とワインはもう買い手がついてるな。いい値段だぞ？ それから、それから……」

思わず口ごもってしまった俺に、不審な顔をするジェシカ。  
「なに？」

これを言ったら、きっと物凄くマズイ状況になる気がする。

「面接希望者が六三八名……」

「あなたに全権委任します。後はよろしく」

言うと思った。

## Stowage The Stowaway 06 (後書き)

『楽園世界』は共有世界です。

詳しくはこちらへ <http://www36.atwiki.jp/2the-paradise/>

「チュッパチャップスですか。知人が良い機体だと褒めていましたよ。ですが、珍しい話ですね。まだ引退するお年でもないでしょう?」

ココモ・リス宇宙軍で使用されている艦載機 船舶と違い小型であるため、重力波発生装置を推進機関として利用可能(1)は、『チュッパチャップス』の愛称で親しまれるFA-6(2)戦闘攻撃機。当時は珍しかったマルチロール機の先駆けとなった機体だったが、開発から二〇年、既に完全な旧式機である。

もっとも、ココモ・リスのような辺境の小国では、まだまだ現役だ。

グンター・シエルベはこの機体に六年以上乗っている、ベテランパイロットだった。

「どうしてです?」

一応は聞いておかなくてはならない事だったが、グンターは言葉を濁し、語ろうとしない。どうやら軍を去る事になった事情を説明するつもりは無いらしい。

経歴を見るとこちらの採用条件は全て満たしている事は間違いないのだが、どうして軍がこんなベテランパイロットを手放す事に同意したのか、どうしても気になるのだ。

「グンターさん、確かにあなたは実に優秀な人材であるらしい。しかし、我々はそれだけで貴方と雇用契約を結ぶわけにはいかないのです。軍を辞める切っ掛けはなんだったのですか?」

その言葉に苦い笑みを浮かべたグンターは、立ち上がりながらため息をもらした。

「それは言いたくないし、言える事も殆ど無い。面白そうな職場だと思ったんだが、残念ながら縁がなかったらしい」

「……わかりました。正式な結果は後ほど改めて通知させていただきます」

きます」

六〇名以上の人々との面談がこれで空振りに終わった。

あと一〇名ほどだろうか？

とてつもない疲労感に、その場でひっくり返って寝込んでしまいたくなるが、流石にそうもいかない。

立ち上がった握手を交わすと展望ラウンジから食堂の入り口まで見送り、次ぎの面談者に声をかけようとした。

「次ぎの」

「まっつて。貴方に決めます」

「はい？」

「は？」

二つの間の抜けた疑問符が宙を飛び、ジェシカの視線に弾かれ霧散する。厨房にいたはずのジェシカが、面接を待っている人々の中から立ち上がって、突然声をかけてきたのだった。

驚き慌てる人々に向かって、断固とした態度でもう面接は終わりと宣言する。

当然非難や抗議の声が上がるが、そんなものを気にする女ではない。

「すでに採用枠は一杯です。あ、貴方。そう、七五番の、クインシーさん。貴方も採用。後はお帰り下さい」

無情に言い放つ彼女に何か言おうとした者はことごとく、あの圧倒的なまでに強烈な視線に射すくめられて、すごすごその場を去っていく。

「あの、あの女性は？」

「船長です。グンターさん、どうやら採用に決まったようです。おめでとう。それから、以後よろしくおねがいします」

とりあえずの握手を交わし、自動機械に飲み物と軽食を注文すると、もう一人の採用者の情報を確認する。

クインシー・リカード・ジョンソン。バートリプトラ出身。この男もやはり元軍人だったが、スチュワード経験もあるし兵站業務の

経歴もある。見た目は完全に陸戦隊か海兵隊の鬼軍曹というところである。スチュワード兼セキュリティ兼貨物管理者としてはうってつけの人物である。

驚きに目を見張るクインシー（リカードと呼んで欲しいとの事だった）と呆れ顔で苦笑するグンター、そして何時もの暴拳に頭を抱えた俺の、三人の男を前に簡単な自己紹介を行ったジェシカは二人にデータ・シートを渡して、再び後は任せる、と俺に言うときと食堂から出て行ってしまう。

「あーなんだ、まあ、ああいう人だ。飲み物と軽食を用意させてあるから座ってくれ。これからの事を説明する」

……こうして、サンディ・メリッサ号の新体制が確立した。

当然の事ながら、防御装置の設置は見送られる事になった。どう計算しても動力炉の出力が足りないのだから仕方ない。

その代わりシェイクが目を覚ましたら、新しい船を手に入れる事で合意した。

ジェシカは今から新しい船を物色しているらしい。

そして俺は、もう航法担当席に座る必要は無い。それはグンターの仕事だからだ。

一応グンターにも船舶の操縦資格はあるのだが、どうやらND（通常駆動機関。融合推進やイオン推進などの反動推進機関）の扱いは苦手であるらしい。

これからはもう、殆ど船橋に行く必要もほとんど無いはずで、多少寂しい気もするが、これでよかったのだ。

そういえば、アスリン共和国は身代金にも糸目をつけず取り返し、大使館員が引き取っていったが、それはまた随分大きなニュースになった。

頭の良いやり方である。

「我々は決して戦友を見捨てない」

そう叫んでいたのはアスリン共和国の大統領だか首相だが、支持



率が急上昇した上、軍への志願兵も倍増したらしい。

そして、そのニュースはもう一つ、大きな変化をもたらしていた。スタラスラドガ政府が小艦隊をココモ・リスに派遣すると発表したのだ。

もちろん二人のサヴァティエ公を引き取るためである。

私掠戦闘行為を行った時点で秘密にするのは無理だろうとは思っていたが、埠頭にドーンバイワース宙域全域から集まった記者連中が押しかけてきたのを見て、流石に頭を抱えてしまった。

もちろん正式にココモ・リス政府の役人がやって来て、遠回しにサヴァティエ公の「保護」を申し出てきたが、ジェシカがせせら笑って追い返してしまった。

連邦法上他国の領地となる場所でそんな馬鹿な事を申し出る役人も役人だが、相手の面子を徹底的に叩き潰して、事実上搭乗口から叩き出した以上、もしかしたら国外退去くらい勧告されるのではなにかと思っただが、ジェシカがリークした二人のサヴァティエ公の映像によって、ココモ・リス政府は護衛の軍を派遣する羽目に陥っている。

そして、スタラスラドガの艦隊が到着するまで、つまり、二人のサヴァティエ公の個人衛士としての役割が終わるまで、サンディ・メリッサ号は身動きの取れない状態となってしまったのである。

「残念だわ。あの子達ともう少し旅を続けてみたかったのに」

もちろん俺の私室ある。

グンターやリカードの前では「あの子達」呼ばわりは絶対出来ない。

因みに「あの子達」は、専用回線が引かれた事で謁見の間と化した展望ラウンジで、今日も朝からせつせと公務に励んでいた。

本当なら宇宙港ではなく地上の大使館にでも入ってもらうべきなのだろうが、迎えが来るなら、それまではここから一步も動かない、そう宣言されてしまったのである。

結果として船内には四〇名近いスタラスラドガ大使館員が詰めか

け、埠頭はココモ・リス政府が派遣した軍と警察の警備部隊が十重二十重に取り囲み、埠頭の外はココモ・リスの星系軍が海防艦数隻と、なけなしの軽巡洋艦相当艦が張り付いている。

つまり、俺達はもうほとんど何もやる事がないのだ。

「もう一波乱あると思ったのに、本当に残念だわ」

ジェシカの炫きはもちろん本気だった。

ガード 1

Gr a D : h t t p : / / w w w 3 6 . a t w i k i . j p / 2 t  
h e p a r a d i s e / p a g e s / 2 4 4 . h t m l

2

F A - 6 戦 闘 攻 撃 機 : h t t p : / / w w w 3 6 . a t w i k i .  
j p / 2 t h e p a r a d i s e / p a g e s / 2 4 6 . h t m l

## S t o w a g e    T h e    S t o w a w a y    0 7 (後書き)

大変申し訳ございません。

こちらの連載はしばらく中断いたします。

再開は、『The Over The Paradise Peak . . .』の完結後になるかと思えます。  
よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4097q/>

---

楽園の旅人

2011年10月5日23時29分発行